# ラブライブ！カラフル！

三河葵

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

あの時９人の女神が駆け抜け、その時９つの輝きが煌めいた世界――スクールアイドル。

これは、二つの時間の後を彩ったあるスクールアイドルたちの物語。

共学校の女生徒である赤羽奏は五人のメンバーや学校の仲間と共に、ライバルと競いながらもラブライブの頂点を目指す。

# 目　次

レッツ・スタート ―――――――――― 1
彼女が嘆くスクールアイドルという現状 ―――――――――― 13

# レッツ・スタート

「えぇー…これから皆さんに大事な話があります」

体育館に響くややハスキーな女声――理事長の第一声。元から今日は全校生徒の集まる集会が予定されていたけど、いつもと空気が違う。私たち生徒側がそわそわ、とは違う。どちらかと言うと先生たちの方に落ち着きが見られない。頻りに見た目にどこか似合わないハンカチで汗を拭う先生、悩ましげな表情を浮かべながら腕を組む先生。三様にしてもいつもと違って余所余所しいというかなんというか……当然、私を含めた生徒側がその状況を理解している人がどれくらいかもよく分からないけど。

…とにかく、いつもと違うことを偶然気取った私は、気持ち分引き締めて言葉の続きを待つ。

「……この私立明和女子学院の近年の入学者が減少してきていることは、生徒の皆さんが知るところだと思います。本年度の入学希望者の数を見合わせても、規定の人数に達していないことが現状です」

理事長の言うところはまったくの事実だった。　…決して学校に対する文句じゃないけど、きっとどこにでもあるだろう雰囲気のこの女学院は、この最近特に入学者が減ってきていた。私が入学する前からその流れはあったけど、決定打を出したのは世間のある「流行」だと口ぐちに噂されている。実際他の学院と比べてどうしてもお堅い印象というのが拭えなかったからとも言われているが、「流行」の正体を知ればその意味にもつい頷いてしまう私がいる。

割と考えに更けてしまったせいで、理事長の話の内容がどこか飛んでいることに気が付いた。まあ、先生の話っていうのは大体お堅いし、全部は聞かなくて良いよね？　うん、きっと大丈夫。

と思ったが、なにやら周りは変な空気に包まれている。一体なにが？　…ひとつの仕切りを置くように、息を少し深く吸った理事長から「……つきましては、我が校は本年度を以って廃校する運びとなりました」

そう告げられた。

……当然、どよめきはあがる。え、待って。わたし来年三年生だけど、それはどうなるの？　どこか転校手続きとか？　いや、それを考えると困るのはみんな一緒だ。先生たちだってどうなるか分からないし、生徒を含めた学校に関わるみんながどうなるのか……

「……皆さん」彼女のゆらぎを余所に、ざわめきの中微かに聞こえた声。ここからなにを期待していいのか。生徒間の動揺が落ち着くまで、理事長はなにも言わずに、ただじっと待つ。

……時間にしては実は一分未満。しかし、沈静するまでにそれ以上の時間を感じたのは間違いない。声が通るだろう程のどよめきは残っているが、静かには違いない。その絶妙な間を縫って、理事長は再び口を開く。

「……生徒のみなさんが困惑する気持ちはよく分かります。……ええー、今しがた廃校は決定と言いましたが、生徒が困らないようと、ある案を施工する次第です」

なんだか含みを感じる言い回しに感じた。微妙に引っかかるというか、なにか疑問に思わざるを得ないような、変な感じ。理事長自身妙に言いにくいのか、少し悩ましげな表情は一向に晴れない。

「…みなさんは、近隣に私立七咲学園があることは知っていると思います」

なにを言うのかと思ったらまさかの単語が……ある伝手によるとあっちはあっちで男女の割合が8：2程と聞くけど……その共学校の名前が出されたことと伝手から聞いた話が繋がる。

あ、間違いない。思い出したことで、彼女の不安は吹き飛んだが、それはそれでこれはこれ。

「そちらの学園長と話をした結果――七咲学園との統合にてみなさんの学校生活を送って頂きます」

「……」

「えええええええええええええええええええええええええええええええ!!?」
同様に、全校生徒のざわめきが再熱する。

---

更に後で聞いた話であるが、そこから五カ月の間で生徒たちの反応や評判を見て、統合に対する反応を窺がいながら、残りの月日で教員や生徒・整理統合の準備というものを急ピッチで進めていたという。それを最も分かりやすく示していたのが、統合先となった七咲学園の春休みに行った改装工事だろう
そして迎えた四月……私立七咲学園という学び舎に場所に移り、私たちは新しい制服を纏い新しいスタートを切った。

---

「ということなんだよねぇ」
「……なんだその学校のパンフみたいな説明は」
「つまり波乱万丈だったってこと」
「こっちもごたごたしたからそれは大いに分かる。　…なあ奏、いい加減」
「赤羽さん！　赤羽奏（あかばかなで）さん！」
「終わった方が、って手遅れだな」
「あ、先生……なんでお怒りに？」
「出席確認そっちのけで話してるからね」
確実に「アホめ」と言わんばかりに肩を竦める隣の男子生徒を横目にしながら、先生のびしっと指を刺される。奏は今の仕草にキュウリを真っ二つにするイメージをうかつに浮かべたことで噴きだしそうになるが、見事に耐え
「なにがおかしいのですか？」
きれず、頬を膨らませたその表情は見事に笑っていた。

「まったく、三年生なのに落ち着きの無い……音也くんからも注意して下さい」
「え、俺ですか？」
「そうよ」
「あの、止めてはいたんですけど、こっちの話が遮られるくらいの熱弁で」
「ちょっと、嘘言わないでよ。止めてない癖に」
「黙って話聞いてればサイダー奢るって話をしていたが、覚えているな？」
「あ、そっか。そんなこと言ってたね。めんごめんご、先生すみません注意されてました」
「…俺にも責任がありますので謝らせて下さい。すみません」
「…良いわよもう」
「おいおい、また夫婦漫才か」
「うるさいぞハゲ」
「オレはハゲじゃねー！　丸刈りなだけだ！」
　周りの生徒からすれば、この二人の掛け合いというのは既に茶飯事として成り立っていた。とはいえ、三週間も経てば二人の関係性はとうに周知であり、そうはならないことも変に理解されているおかげで、冷やかしの声も少ない。
「なあなあ黄瀬音也さんや。本当に赤羽さんとは幼馴染みなだけ…だよな？」
「あぁ」「うん」
「ハモった……」
　「しかしいつ聞いても信じられん…」音也を冷やかした友達、亀田誠一は腕を組みながら唸る。世間の言葉として「男女間に友情は無い」というものが存在するも、果たしてこの二人に当てはまるのか……訝しむほどに音也と奏の関係は固まっていた。
「それでは！　ホームルームを始めます！」
　大袈裟に咳を払ってから、先生による号令が響く。

―――

「あぁ～あ、三年生かー」
「そりゃそうだろ。つーかお前……」
「なに？」
「……大丈夫なのか？」
「なにが？」
「その、なんだ…新しい学校に慣れてきたようで安心したよ」
「……あぁ」
　ホームルームを終えての休憩時間、移動教室でもないことから席から動くことなく、奏と音也は駄弁っている。最初こそ他愛の無い会話だったが、話題は自然と統合の話へと変わった。
　事実、奏にしてみればここに来るまでの二年間と今では環境はまるで違う。通い慣れていた女子校が無くなり、共学校との統合という現状。　……はっきり言ってしまえば、この状態を一番好意的に受け取っているのが奏であるだけで、基本的な評としては本統合に対して否定的な意見がまだ多く見られている。
「そういう音也はどうなの？」
「俺は嫌とかそんなこと無いな。少なくとも、女子が少なめだったこの学校で女子が増えてくることに、男子は歓迎状態だ」
「うわぁ…下心が強めとは…」
「待てや。俺にその気はほとんどねーよ。むしろ、バランス取れて共学校らしくなったなって思っただけだ。　…じゃなくて、お前は今の学校生活はどうなんだ？」
「そうだねぇ……元の学校で卒業出来ないのは残念だけど……響も廃校阻止は頑張っていたし、仕方ないよ。今は今でなんとかする。それしかないよ」
「…そうか」
「それに、割と楽しんでるからね。他の女子の友達は微妙な反応だけど」
「まあ気持ちは分かるな。急に知らないところに放り込まれたんだ、みんながみんな、奏みたいに慣れる訳でもないし」
「うーん難しい…」

奏の表情に少しばかりの陰りはあるも、言葉通りに重く引きずる様子は見られない。元より前向きで元気なところが取り柄なだけに、彼女は唸りながらも紙パックのジュースを吸う。

「おーっすお二人さん」二人のやり取りに構わず、どこか飄々とした声調が間に入る。印象の話をすれば、真面目だが愛想の良くない音也に比べ、ラフでひょうきんな空気を纏った誠一。一見真逆だが音也とは中学からの友達であり、部活で同じ軽音部のメンバーの一人である。ギターより簡単そうだからとベースを担当しているが、今では難しいところも理解した上で楽しんでいたりしている。

彼の空気を敢えて悪く言えば遊び慣れていそうにも見えるが、「ちょいとごめんね」と悪びれる様子からも分かる通り、空気は読めるしマナーも弁えている。とはいえ、基本的に茶化したりイタズラを趣味としているが、度を超えたことはしたがらないのが彼の信条だ。

…などという事はさておき、朝に奏を茶化した亀田誠一は、机を介して向かい合う二人の横に椅子を置く。

「…誠一。また茶化しに来たのか？」

「そう何度もしないっての。オレだって空気は読める」

「えぇっと…誠一くん、で良いよね？」

「…思うんだけど、出会って日が浅い人相手って普通苗字呼びじゃない？」

「こいつ体育会系だからな」

「馬鹿にしすぎでしょ。こう見えてもわたし、美術は４だからね」

「運動得意なやつって大体勉強苦手だと思うだろ？　こいつの成績、３以下は無いんだぜ？」

「そうなの!?」

「凄いでしょ。むふー」

音也と違い、共学になってから奏と知り合った誠一にしてみれば衝撃そのものだった。マンガとかのイメージでもあるが、割と現実でも当てはまること多い説でありながら、彼女はそれに該当しない。感嘆の言葉を漏らすことしか出来ず、気付けば彼は、したり顔を浮かべる彼女に小さく拍手を送っていた。

「あ、そうだ音也。あの話したのか？」
「いや全然」
「？　なんの話？」
「お前バスケ部だろ？　する必要が無いと思って言わなかったってだけだ。気にするな」
「なによそれ。そう言われたら気になるじゃない。あと、今はバスケしてないから」
「どういうことだ？　その話初めて聞いたぞ」
「それはいいから教えてよぉ！」
「だあぁ分かったよっせぇな！　……けど後で教える」
「なんでぇー!?」
「今から授業だからだ」
　正に言い終えた直後、正確には食い気味のタイミングでチャイムが響いた。

―――

「……えぇーっと、ここは？」
「ちゃんと書いてるだろ？」
「……スクールアイドル同好会」
　結局時間が必要だという判断から、昼休みまで持ち越された話題。なにひとつの情報も渡されないまま、不満を胸に連れて行かれた先に奏はきょとんとしていた。実際「聞くよりも見に行った方が理解も速い」という音也の意見に賛成してこうなったもの、スクールアイドル同好会と手書きで書かれた張り紙の存在が、異様な胡散臭さを放っていた。
　……この時点で疑問は湧いた。優先順位には悩まされたが、その結果奏は張り紙から音也に視線を移す。
「…音也って軽音部じゃなかった？」
「俺はそうだぞ。　……図らずも部を兼部しているけどな」
「まさかと思うけど」
「そ。この同好会と。ま、部と同好会を兼ねることを兼部と呼べるかは怪しいけど」

当惑する音也と割と軽いノリを保つ誠一。あまりに対照的な反応を一度に見たこともあって、彼女は一層にリアクションに悩ませていた。

……とはいえ、奏は薄らに予感していた。事情に詳しくはないけど、自分の知る範囲でのスクールアイドルという言葉の意味……呼ばれた自分……断片的な情報でしかないが、ひとつの答えが離れずにいる。

「…もしかして、ゆかりがわたしにアイドル同好会に入って欲しいってやつ？」

「これ以上ない完璧な正解なんだけど…音也」

「だな。ゆかり、来たぞ」

やはりと奏は頷いていた。スクールアイドルという単語と音也の紹介の時点である程度予想出来ていたが、やはり知った名前が顔を出すことになった。構わずにノックする隣で、少しばかりの高揚感を覚えながら、部室から出てくる顔を心待ちにする。

そもそも、なぜその名前を予想出来たのか。そこにも理由はあった。

「――あ、奏ちゃん来た来た！」

「やっぱりゆかりなのね！」

「……考えたら、兄と腐れ縁なら妹のことも知ってるよな」

「そりゃそうだろ」

首を覆うまでの程度に伸ばされた髪と快活な表情で出迎えた黄瀬ゆかり――音也の妹は当の兄と打って変わって、見るからに表情が穏やかで人懐っこく、知らぬ人が見れば音也と兄妹であることは信じられないほど真逆な空気を醸していた。更に言えば、音也や誠一同様に軽音部のメンバーでギターを弾いていると言われても、一度で信用することも難しいだろう。

「もー！　ちゃん呼んでって声かけてたのに！　なんでこんな時間かかってるの兄ちゃん！」

「奏にも都合があるんだよ」

「う、まあそうだけどぉ…」

「まあまあ。　…で、用件はひょっとして、スクールアイドルやろうってところ？」
「…だね」
　…兄妹という近い仲で無かろうと、ゆかりの表情が少し陰ったことに音也は勿論、奏と誠一にも気付いていた。誰しも疑問は無い訳じゃない。
「…とりあえず、立ち話もだから部室に入る？」
　主に奏に尋ねる声調で、彼女は扉を広げる。

―――

「へぇ…」その部屋に入ることは初めてだった奏にとっては、室内に充満する空気というのは極めて特殊だった。机の置き方を見ると部室と呼ぶよりは、どちらかと言えば簡易的な会議室にも思えたし、棚に並んだ雑誌からも言い得ない存在感が放たれていた。なんとなしに手に取って広げると、すぐにそれがスクールアイドルの専門誌であることが分かった。知識の浅い彼女から見ても、ページを５回めくるだけで理解出来るほど、雑誌内の色合いは自分の持つスクールアイドルのイメージと同じ、彩りに溢れていた。
「これ全部ゆかりの？」
「うん♪」
　活発な性分であることは知っていたが、まさかここまで表情を柔らかくするとは。少し意外だなと頷かせながらも、奏は興味深げにページをめくる手を止めない。
　スクールアイドルが好き。思い返せば、なにがきっかけでそうなったのかは聞いていない。気付いたら彼女は、スクールアイドルの輝きに当てられている。そんな印象だった。その理由について興味が無いと言えば嘘になるが、そこは本人の寄るところだ。機会があれば聞いてみようと奏は留まる。
「…しかし、みんな綺麗だねぇ」
「でしょ？　それなら」
「でも、わたしはスクールアイドルにはならないよ」
「え」

…実のところは、奏は言うか否かを迷っていた。ゆかりとの仲は無論睦まじいし、誘ってくれたことに対しても嬉しい気持ちはある。しかしそれ以上に、彼女にはどうにも気乗りしない要因があった。沈んだ表情の相手に言うのも気が引けるが、嘘を吐く方がよっぽどだと奏は腹を括る。

「…だってわたし三年生でしょ？　スクールアイドルのことは良く分からないけど、役立つ経験も無いのに今から始めても……ねえ？」

「意外とそうでも無いよ」

「…どういうこと？」

「ラブライブ、って言葉は知ってるだろ？」

「まあそれくらいはね」スクールアイドルに詳しくないにしても、スクールアイドルという単語を知っていると必然的に知るもう一つの言葉。学生たちで構成されたアイドルをスクールアイドルと呼ばれ、スクールアイドルによる大会をラブライブ……昨今の熱を考えれば知らない学生を見つける方が難しいとも言われているが、男の音也にはそれがいまいち分かっていない節もあってか、確認の意を込めて尋ねる。答えは無論既知。

「ゆかりが言うに、そのラブライブの優勝グループにも三年生は、その年からアイドル活動を始めた人もいたらしい」

「そうなの？」

「うん。学年に関わらずその年からアイドル活動を始めたって人もいるみたい。しかもそれが優勝グループにもいたんだって。　…確かにスクールアイドルと関わりのない分野を繋げたした人もいるけど、歌もダンスも経験無かったって人がメンバーにいる、というのは意外とある話みたいだよ」

「いや、とは言ってもねぇ…わたし言う程可愛くないような気も」

「そう言っていた人もスクールアイドルしてた。えっと、確かこの辺りに……ほらこの人」

　言いながらゆかりは忙しくページをめくる。「優勝グループのインタビュー」という文字と並んだ彼女たち――Ａｑｏｕｒｓ（アクア）というグループに指が止まる。

「このちんまりした子？」
「そ。黒澤ルビィさん。元は人見知りで自分に自信が無かったけど、友達とアイドル活動していく内に自信がついて、歌って踊ることに楽しさを感じられるようになったって」
「……なんというか、こうして見ると……言い方悪いけど、本当に普通の学生がしてるんだね」
　ゆかりの解説を聞きながらインタビューのやり取りを目で追うと、なるほどその通りの子だなと理解も容易かった。一言一言は少し覚束ないかもしれないが、芯の通った発言も節々に見える。そしてこの写真の笑顔。衣装を纏いながらも素に近い表情というものが垣間見える。そこがどうしてか、自分たちと同じなんだなと認識させる要因になっていた。
「大袈裟に見られがちだけど、変な話、部活動としてスクールアイドル部があるところもあるくらいだしね。基本は普通の学生さんってのは正しいと思うよ」
「うん。　…奏ちゃんの都合も分かるけど、出来れば少しだけ考えてみて欲しいなって。あたし、スクールアイドルするとしたら奏ちゃんと、って決めてたから」
「……うん、考えてみるね」
「っと、そろそろ昼休み終わりか。じゃ、一端はここまでにするか」
「だね。またね、ゆかり」
　割と想定内の話は収まり、ひとまずにと場を後にする。
　……スクールアイドル。果たして自分に出来るものだろうか？
そういう人がアイドルをしたという話を聞いた側にしても、その世界に関して詳しくないだけに、熱意というのも割と低かった。
　一方で興味が無い訳でも無かった。これでも奏は合唱部の経験はあったし、歌も人並みに好き。加えて運動部に属していたこともあることから、体力の話をするならそれなりかもしれない。　…敢えて自己評価をするなら、自分がスクールアイドルをすることは
　――μ’ｓの様に輝きたいって思ったことをきっかけに始めたスクールアイドルですが、最後までやって良かったと思います。みんな

の知るあのメンバーと歌ったこと、踊ったこと、笑ったこと、悩んだことの全部が宝になったからです。

…そこまで思索して、止めた。インタビュー記事にあったその一文……高海千歌（たかみちか）というスクールアイドルが放ったその言葉に頭を響かせることで、奏は理解する。彼女の事は有り体のものとも聞こえるが、極めて純粋だ。その言葉の後で自分がアイドル活動なんてあまりに軽率過ぎるし、自分よりやる気のある人だっている。とりあえずで時間も貰えたし、はっきりした答えを出すまではと、奏は「ふむ」と零しながら廊下を歩く。

## 彼女が嘆くスクールアイドルという現状

――放課後。不思議とスクールアイドルという単語が離れないまま、奏はその時間を迎えていた。ステージで歌って踊る自分……そんな妄想をしたりしなかったりを繰り返すという我ながら珍妙なことをしている内に、正にあっという間の時間が過ぎている。これには彼女自身も驚く程だった。

「……単純だなぁわたしって」

これだけの想像をする程だ、最早興味が無いとは言えない。しかし、自分が三年生ゆえにこれからの事情というものを考えざるを得なかった。

近しいところを言えば受験、部活動等をしていれば当然耳にする「最後の大会」めいた単語……そして卒業。一年間に出来ることはいくらでもある、そう考えながらも三年生という立場にいることが、少しばかりつらくなった。

スクールアイドルの規定というものはよく分からないなりに、彼女は推理する。スクールアイドルがどこまでを指すのか考えた時――恐らく、高校生までが限界。話を聞いた限りでも「大学生」の単語が出なかったところを聞くと、対象の学生は高校生ほど。――つまり、どう頑張っても自分には最初で最後のアイドル活動になる。

「……」

少しだけずるをしよう。なんて考えながら、奏はある場所へと脚を向かわせる。

――

「どうぞ」

恐る恐るのノックに対して返された落ち着いた声。「生徒会室」の札がかかった扉をスライドさせてから、奏は室内書類整理をしていた女子に声をかける。

「やっほ響。なにか手伝う？」

「大丈夫よ。終わったところだから」

なにか資料を作っていたのか、数枚ほどの紙束を整えてから、女子

は疲れたように眼鏡を整える。実際疲れていることは「ふうっ」と零した息の重さからも伺えるが、同時に一つの仕事を終えたことから解放感も見て取れた。

――青葉響（あおばひびき）。明和学院からの生徒会副会長であり、七咲と統合してからも、その手腕を買われてこの役職を継続している。無駄なく整ったセミロングの髪と洒落な雰囲気を感じさせないタイプの眼鏡が、一層に彼女の生真面目さを醸し出していた。一見すれば無口で無愛想とも言えるが、静かで落ち着いた様子は正に凛然と評言出来る程に、彼女は澄んでいた。

「で、なにか用？」

……どこか他人行儀な語調。奏とは同じ統合前からの仲であり、更に言えば音也と奏を合わせた三人での幼馴染み。そういう関係にも関わらず、響の声調は嫌に遠く聞こえる。

だが、その関係は今に始まったことじゃない。それに負けじと張り合うように、敢えて奏はいつも通りの明るさで振る舞う。

「用事、って言うのかちょっとした相談というか…」

「その顔だと相談みたいね。どんな話？」

「…仮にね。仮の話ね。わたしがスクールアイドルになるって言ったら？」

……部活動や遊ぶ時、ほとんどのことをする時はいつも一緒だった二人。もしもこれで前向きな返事が貰えたなら……奏は仄かに期待するが

「へえ、スクールアイドルね。それは意外。するつもりなら応援するわ」

…それは奏の望んだ反応とは違うものだった。非常に素っ気なく、極めて他人行儀。驚きに口を開いていたもの、反応は想定した物から外れることは無かった。それどころか、聞いてから返事までの時間というものは短かった。突拍子も無い話題を切り出したつもりなのに、ほとんど意に介してないようにも見えてしまう。肯定的な意見を言っているが、関心を示すだけでそれ以上の反応は起こらなかった。

「成る程、それを考えているってことね。貴方合唱部だったし、運動も

得意なんだから悪くないと思うわよ」
「ありがとう。　…ねえ」
「貴方のすることなら応援するわ。　…確かスクールアイドル研究同好会というのがあったわね」
「……」
「発想は悪くないにしても、いかんせん部員が少ないのよね。おまけに部活動としての内容も怪しいし、結果の出せる部とも思いにくいし……」
　果たしてわたしはどう思われているのか。こうして力になってくれることもあるが、基本的にはどうしてもあしらわれる部分が強いし、気付けば異様な距離感を保った関係として今も維持されていた。
　親友として並び立っていたことも今はあの時、なにをするにも一緒だった時間は、奏自身の知らない内に冷えたものに変わっていた。

――――

「……はぁ、なんで響と上手くいかなくなったんだろう」
「そもそもなにやらかしたんだ？」
「わたしはなにもしてないよ。一緒に合唱部やって、一緒にバスケ部やって……ケンカなんてしたこと無いよ」
「奏ちゃんがそこまで言うなら本当みたいだね」
　用事も済ませてから、奏は黄瀬兄妹と一緒に近くのファストフード店に足を踏み入れていた。静かなところで一人悩ませるほど、なにか沼に足を取られたような気分に陥りかけた為に、半ば助けを求めるように誘ったものだが、二人は快諾したことで今に至る。　…軽音部の活動もあるというのに、なにも言わずに切り上げた辺り、奏の状態を概ねに察していたからに他ならない。
「いつからその……距離が空いたの？」
「んー……中学二年…いや三年か。でも上がった頃は本気で嫌われていたんだよね。それこそ一緒にいることも嫌がられてたくらい」
「そんなに？」
「……確かにそんな空気だったな。俺も声かけたことある」
「なんて言ってたの？」

「あまり言いたくないが……明らかにお前の絡む話題は避けていた」
「そう…でも、その頃に比べて相当良くなったではあるんだよね」
「でも最後の一線みたいなものがあると？」
「うん。どうしても、一緒になにかをしたがらないの。応援するだけ」
　周囲のがや騒ぎと対比した、ぽつりとした一席。並んだフライドポテトもジュースにも然程そそられなかったが、奏は少し無理にと手を伸ばした。
「…俺からも青葉と話をしてみる。なにか分かったら伝えるよ」
「…良いの？」
「無駄に元気なのが取り柄な奴に落ち込まれたら、こっちまでへこむんだよ。それに、俺だってあいつの知り合いだけどな。　……高校離れてからは初めて会話するけど」
「…ありがとう」
「気色悪いな。いいからさっさと食え」
　そっぽ向きながら、音也はぶっきらぼうに言葉を投げる。隣ではゆかりからの冷やかしの視線を放られるが、こんなことは茶飯事だから無視…といかず、軽く睨みつけて退散させる。
「ねぇ、本当にしないのぉ？」
「その気は無いわ」
「でも、このメンバーでラブライブに出られるのは最後じゃけえ。わしは」
「…あまり言いたくないけど、わたしはどうしても、今のラブライブに出たいと思えないの」
　賑やかを取り戻した矢先に、後ろの席からタイムリーな話が聞こえてくる。　…つい釣られると、三人の女性が険しい顔を向けあっている。奏たちの悩みとは違ったものだが、深刻なものであることは明白だった。
「そう？　ラブライブは年々盛り上がってるわよねぇ？」
「ええそうね。ラブライブもスクールアイドルも年々盛り上がってきている。レベルも高くなってきている。　…だけど乗れないの」
「なんで？」

「……スクールアイドル間に囁かれてる優勝の法則を知ってる？」
　独特の間延びした語尾の女性は知らないらしく、口元に指を置いて思案している。無論奏と音也も初めて聞くものだが、ゆかりは思い出したようにあっ口を開く。
　…少しばかり呆れたような表情を浮かべながら、女性は答えを口にする。
「……メンバーは９人であることが理想。ハーフ、またはクォーターがいると尚良い。　…だって」
「それって……」
「雑誌とかで見る度に異様な気分になるの。みんながみんなμ’ｓに憧れ、μ’ｓになろうとしている。　…勿論、違うところもあるかもしれないけど、暗黙でその法則が噂されている。そのお陰でスクールアイドルの行きつく先が一つ二つと絞られてしまったの。　…わたしの言いたいこと、分かる？」
「……スクールアイドルの個性が減っていく？」
「スクールアイドルの定義がはっきりと決まってしまうの。はっきり言えば、μ’ｓになれば一番のスクールアイドルになれる。それが現状だと思ってるの」
　…リーダーと思しき女性の発言とゆかりの答えは、ほぼ重なっていた。界隈に浅学である奏と音也にしても、それが危惧された発言あることも、ひとつの極論だろうとも理解出来ていた。しかし、身に覚えがあるゆかりにとっては表情を落としてしまう流れとなっていた。
　女性は一息を入れるように、ドリンクを口に含む。語調に熱が入っていたが、これをきっかけに少し欠けていた冷静さを取り戻してから話題に戻る。
「…別にμ’ｓがしたことが悪いという訳じゃないの。実際μ’ｓは後にも先にも起こらないことを成し遂げたし、実際真似することも難しいし、そこに憧れる気持ちも分かる。けど、そこに傾いてるせいでμ’ｓ以降の優勝グループは、一部では「μ’ｓと比べて地味だよね」なんて意見もあるの。その最たる例がＡｑｏｕｒｓよ」
「まあ確かにそうだけどぉ…」

「余所は余所、わしらはわしらじゃ。そんなこと」
「そう考える方が少ないのよ。　…だからわたしの意見は、スクールアイドルとしては」
「ちょっと待って下さい！」
　奏自身が一番驚いていた。向こうのスクールアイドルに会話に、なぜ自分が割り込んでしまったのか。冷めた言い方だけど、自分とは関係の無いはずなのに、気付けば身体の方が勝手に動いていたのだった。
　奏の次に驚いていたのが、後ろで話していた三人の女性。スクールアイドルという話をしていた以上、当然三人の女子高生。おっとりとした口調と語尾の似合うふわっとした髪の娘、時折出る広島弁が特徴的な娘、そして二人と違った落ち着いた佇まい。彼女こそ大まかな発言の主――リーダーと思しき人物だろう。意外と分かりやすいなと感心したのも一瞬だけ、奏は目を点にしたままの相手に碌な知識も無いまま否定に回る。
「事情は分からないですけど、なにもしないうちにしないのは違うと思います」
「止せって奏……すみません。」
「あ、この人たちって……奏ちゃん」
「待って、もう少しだけ言わせて」
「向こうには向こうの事情ってのが」
「向こうの事情…ということは、話を聞いてた？」
「あ、はい…」
　僅かなやり取りから感付かれ、奏は「うっ」と肩を竦ませてしまう。
「…今のラブライブというのはね、以前と状況が違うの。良いスクールアイドルが評価されるんじゃないの。μ，sに近いスクールアイドルが評価される。それが今の世間なの。そこでわたしたちが出場したところで」
「スクールアイドルが嫌いなんですか？」
「え？」不意な問いかけに対して、彼女は言葉を詰まらせる。ある種単純明快な質問、だからこそ核心に近いところへと触れられる。

「…好きに決まってるわ。アイドル、これほど楽しい世界に出会ってしまうと、続けたくもなるわ」
「じゃあやりましょうよ！　スクールアイドルって期間は限られてますし、参加もしないであれだこれだって言っても、なにも変わりませんよ！　好きなのにしなかったら、ずっと後悔すると思います！」
「……」
　怒号とはまったく違う、それは正に声援と同じ背中を押す言葉。引き止める奏の言葉から、不思議と力を感じた彼女は……例えばひとつの作品を終えた後の圧倒された感覚に覆われていた。
　それと同時に、脳内に張り付いていた鉛の塗装が溶け落ちる音がした。
「ふっ――――あっはははは！」
「唯さん？」
「どうしたけぇの!?」
「ふふふ、そうね。なにもしていないのに愚痴を言うだけ言って逃げるなんて……目が覚めたわ」
「唯先輩…？」
「ありがとうね。わたし、スクールアイドルをするわ。愛、葉。これ食べたら戻りましょう。話をしなくちゃ」
「……っ！」
「おぉおおおぉ！　誰か知らないけどありがとう！」
「い、いやいやそんな大それたことは……」
　広島弁の女性に握られた手をぶんぶんと振られ当惑するが、奏には悪い気分はしなかった。正直細かい事情は良く分かってないけど、彼女たちが笑顔になれたことに対して素直に嬉しい。
　残り少なかったポテトを食べ終え、三人はテーブルを立つ。その顔にはさっきまでの険しさは無く、むしろ穏やかなものになっていた。
「さて、突然言ったらどうなるかしら」
「困るのは間違いないだろうねぇ」
「それはそうじゃけえのう」
「……迷惑かけてごめんね」

「良いんだよぉ～始めてくれるからぁ」
「わしらは良いけど向こうがかなぁ…」
「分かってくれるわよ。元はラブライブを優先しないのかって話も出ていたし、この際甘えるわよ」
　ゆかり以外が首を傾げる会話をする中、リーダーと思しき彼女は奏に向き直る。
「…あなたもスクールアイドルを？」
「あ、いえ…恥ずかしながら考え中と言いますか…」
「個人的には、あなたが参加してくれると嬉しいわ」
「そ、そうですかね」
「そうなの。　…ん、確かその制服、最近統合した七咲学園ね。機会があれば顔を出させてね。それじゃあまた」
「は、はいまた～…」
　我ながら情けない返事をしたなと思いつつも、ひらひらと手を振ることを忘れない。奏は、なんとなしに打ち解けれた三人を笑顔で見送る。
「どうもすみませんお騒がせしました」
「本当にすみませんでした」
「はっ!?」
　奏たちが盛り上がっている間に、ゆかりと音也は周りへの謝辞にて沈静化を図っていた。

―――

「それにしても、変わった人たちだったねぇ～」
「多分さっきの人だけじゃけえの」
「それでも、あの人たちに感謝しないとね」
　帰路、とは違った道を辿っているが、三人は談笑を交わしながら足を鳴らす。時折通り抜ける同年代の少女が彼女たちを眺める中、彼女たちはその視線に対して手を振って応える。
「話してて気になったけど、あの人たちってわしらのこと知らなかった？」
「あ、やっぱりぃ？」

「でしょうね。スクールアイドルに詳しくないって言ってもいたし」
「ふふっ、まさか知らない人に諭されるなんてねぇ～」
「知らないからこそ言えたことかもね。　…なんにしても」
凛とした表情だった彼女は二人に振り返る。力の抜けたその笑顔は、感じていた印象とは裏腹に幼く、それこそ子どもが空の向こうの飛行機を指さすような高揚感が溢れていた。
「これからが楽しみね」

――

「と、ｔｒｉｐｌｅ（トリプル）　ｊｏｋｅｒ（ジョーカー）……」
帰宅後、ゆかりからの強い要望で受け取ったスクールアイドルの情報雑誌を眺めていくうちに、奏はあるページに手を止める。　…なるほどそういうことかと、彼女はその瞬間に理解した。
ｔｒｉｐｌｅ　ｊｏｋｅｒ……彼女たちはスクールアイドルではなく、正にプロデビューを約束されたアイドルだった。スクールアイドルでない彼女たちがなぜこの雑誌にいるのか……紹介文を読む限りだと、彼女たちの実力は折り紙つきでラブライブへの出場が叶うとしたら確実に全国を狙えるとも謳われている。まさかとんでもない人に偉そうにしていたとは…奏は店内でのしでかしを振り返って頭を抱える。
更に読み進めていく内に、あるところに目を止めた。インタビュー記事を見る限りの話ではあるが、確かにスクールアイドルをすることを尋ねられた際に暗に拒否を示す言動が見られている。リーダーだと思っていた彼女――御剣唯（みつるぎゆい）の発言の節々が遮られているが、事情を知った今なら、スクールアイドルをしたくない理由を口にすることを避けられていることが明白だった。
にも関わらず嫌味を感じないのは、おっとりとした女性の姫路愛（ひめじあい）が放つ朗らかな空気と口調、広島弁の天王寺葉（てんのうじよう）の明朗快活な部分に寄るところかもしれない。無論、インタビューというものに縁が無い奏にはそこまで想像の限界だった。

…今後はどうなるんだろう。ここに書いてあるのは当然過去の記事で、考え直すと口にしたのは今日の話だ。ラブライブに参加するとして、その参加表明はどうやってするんだろう？　この雑誌？　……どうしても門外漢である奏には、想像を付けようがない。

「…あ、天王寺さんってわたしの一つ下なんだ」

なんて知識を覚えてから気が付いた。　……わたし、やっぱりスクールアイドルに興味があるのかもしれない。言いたいことはあるし、自分の立ち位置も分かっている。けど、自身に湧いた高揚感を説明することは難しかった。その様相は困惑ではなく、むしろ夢中に酔った感覚に近しい心地良いものだった。

…明日ゆかりともう少し話してみよう。口の端を緩ませることに気付かないまま、奏は自然と雑誌のページをめくる。